

# 李登輝不屈の国家戦略「誠實自然」

拙宅の居間には額に入った1枚の複製の書がかけられている。「誠實自然 李登輝」とあって、色具合のいい落款が押されている。精神の「あるがまま」がたおやかに描かれていて心和む。1978年に台北市長になった頃から李氏は依頼されれば必ずのように「誠實自然」を揮毫したという。時の総統の蔣経国に抜擢され、いよいよ台湾政治の前線に立った頃のことである。みずからを鼓舞し人の心を高揚させるような書だと思いきや、実はその逆であった。

## 林建良氏の著作を読み

李氏は日本統治下の台湾に生まれ、22歳までの人格形成期を日本のエリート教育の中で過ごしてきた。国民党一党独裁下の過酷な台湾の政治体制を改革するには、国民党という当時の絶対的な権力集団の懐の中に飛び入り内側から民主化をめざすより他なしとみて、蔣氏による抜擢に応じたのである。かくして李氏は日本統治時代の台湾とはまるで異なる陰翳で激情的な「中国官廷政治」の中に身を置くことになった。そして自

分の青春時代を包み込んでいた日本文化の「誠實自然」に改めて深く思いをいたしたのであろう。

畏友・林建良氏がこの度『李登輝の箴言―未来の日本人へ、不屈の台湾国家戦略を支えたもの』（ダイレクト出版）を上梓した。林氏にこそ李氏という人間の真実を書き残してほしいと私はかねて考えてきたのだが、願いがついに叶えられた。林氏は2001年から10年余にわたり李氏のスピーチライターを務め、時に私的なアドバイザー役ともなった。林氏は李氏の精神の内面に深く切り込む筆力にも恵まれている。

林氏によれば台湾の政治的民主化の幕が切って落とされたのは、李氏の「誠實自然」によってであったという。1988年に蔣経国総統が急死、副総統の李氏が憲法規定により総統となった。蔣氏の残任期間を務め上げた後、なお総統をつづけるためにはみずからが

国民大会代表というのは、47年に大陸で選出され、その後は一度も改選されることなく議員として居座りつづけた「万年議員」のことである。中華民国が全中国を代表するという虚構を前提にしての議員である。台湾住民の意思は何一つ反映されることはなかった。

## 正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

生存のためにはこれしか道はないことをひたすら説きつづけて、全員の辞職がなった。誠實が政治的な力の源泉であることを事実によって証したのである。

李登輝という人間のいかにも大きな度量がここに象徴されている。そしてこの度量は、権力それ自体に執着することなく、むしろ権力は民衆から一時的に預かったものに過ぎず、いずれは民衆に返還されなければならないものだという李氏のもう一つの信条から生まれたものだ。林氏は指摘する。

## 日本の指導者はどう読むか

実際、2000年3月の総統選では3人の候補者、国民党の連戦、国民党を離党して無所属で臨んだ宋楚瑜、民進党の陳水扁が接戦を展開、連戦に向かうはずの票が宋に流れて民進党が勝利するという画期が生まれた。ここで李氏は総統残任期間終了と同時に国民党主席も潔く辞し、台湾に新たな野党と民主化の時代を招き寄せたのである。

一強体制の道をひたすら歩む隣国の指導者には到底理解できない李氏の転進であった。

2000年に政界の首座を去るあたりから、李氏は求められた書が新たに揮毫するようになった書がある。「我非不是我的我」である。解釈には若干の幅が残るであろうが、大略「私は私でない私」といった意味である。青年時代から李氏は「我執一からどうやって解脱するかを自問しつづけて西田幾多郎哲学に深く傾倒してきた。我執から解き放たれるには自己に執着するのではなく他者を許すことにより、自己中心的な自我を脱して他者に寄り添う心が生まれると考えたらしい。

林氏はこういう。総統選挙を国民投票に変更し、すべての台湾人にみずからの権力を渡し、みずからの運命をすべての台湾人に委ねたという、台湾民主化のこの決定的な事実の中に林氏は「我非不是我的我」の精神をのぞきみている。林氏のこの著作が日本の指導者の胸を少しも騒がすことになつてほしいと密かに願っている。(わたなべとしお)